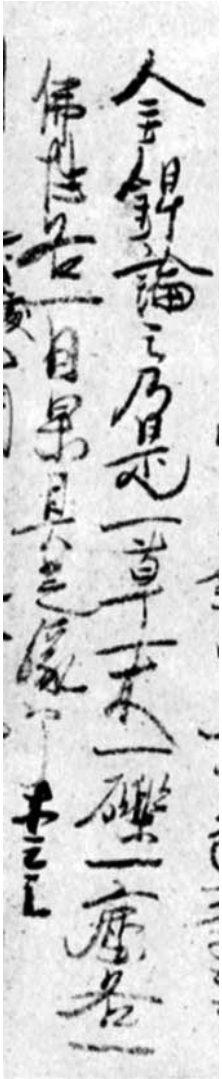
今月の御聖訓



（金錍論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵、各一）

金錍論云。乃チ是レ一草・一木・一礫・一塵、各一

（仏性・各一因果あり。縁了を具足す」等云云。）

仏性・各一因果アリ。具ニ足ス縁了ヲ一等云云。

【観心本尊抄　全集二三九頁】

目　　次

今月の御聖訓

巻頭言……菅野憲道　1

お講講話「一念三千と草木成仏」……菅野憲道　2

御書と日興上人〔163〕……松田銘道　8

【採過拾新録】「戸田城聖氏大奮戦」……10

【寄稿】「弥山・八経ヶ岳・山上ヶ岳山行記」……森　秀之　16

恵日だより……19

八月の行事　葉月詠草　恵日俳壇　訃報

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　　題字：立正安国論より拝写

巻頭言

不信謗法

菅野憲道

「民、信なくば立たず」という論語の一節がある。孔子が政治の要諦を問われた時に応えた名言である。なるほど国家も社会も、政治・経済も信があってこそ成り立つ。

しかしながら近年、政治不信をまねくような不祥事が多すぎるのではないだろうか。信は一朝一夕に成り立つものではないが、失われるのは早い。政治不信が人間不信にまで拡がっていけばそれは亡国の始まりでもある。

法華経には「信を以って入ることを得たり」と説いて、仏道に入るには、覚(さと)りや智恵才学は必要ではなく、ただこの妙法蓮華経を信ずるのみと説く。華厳経にも「信は道の源、功徳の母」と説かれるし、聞・信・戒等の七聖財にも挙げられている。このことは、その人の心に信が有るか無いかで正邪・善悪・貴賤が分かれることを意味する。世法の信が他者との関係において語られるが、仏法の信は己れに向けられ、信があるかどうかが問われている。菩提心にはほど遠く、宗教心など関係ないと放棄する自己不信も現代病の一つかもしれない。もっとも宗教不信は宗教者不信でもあるから、よくよく自戒しなければならない。「顕謗法抄」に云わく、

「不信とは、一切衆生悉有仏性を信ぜざるは闡提の人と見えたり。不信とは、謗法の者なり。」

お講講話（要旨）

拝読御書　「観心本尊抄」（全集二三九頁）

一念三千と草木成仏

菅野憲道

「観心本尊抄」においては、冒頭から摩訶止観第五の一念三千の引用から始まり、拝読の箇所では、百界千如、一念三千について説明されていますが、百界とは我われの一心一念、瞬間的な心の働きの中に、すでに地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界のいのち、十種の世界が具わっていて、その十界にまたそれぞれが互具していることで百界になり、さらに百界がそれぞれに相・性・体等の十如是の要素をもっているから、それで千如になるとされます。

十如是とは「方便品」の相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等の文で、「諸法実相」つまりあらゆる物事の真実のあり方を説いた経文です。どんな現象や存在でも、その相、姿があり、そのもの本質・本性があり体質・潜在力・作用・因・縁・現在の果・未来の報と、いろいろな要素の複合し集積したものなのです。その他にも、五陰世間・衆生世間・国土世間という三世間も各々に具わります。前の二つは正報といい、我われの身心や生物種です。その拠り所は依報であり、環境の国土世間です。

すなわち一微塵にも宇宙のすべての要素が具わるように、一

《一念三千は難信難解》

一念三千とは仏教の極理で、一念＝すなわち衆生の瞬間的な心の働きにも、三千の諸法＝あらゆる現象世界が具わっているという法華経の観心の法門です。この一念三千論は天台大師が創説した法門で、これによって初めて一切衆生成仏の原理が明かされたといえるでしょう。但しそれは、理の上のことで、実践的、実体的な事の一念三千としては、日蓮大聖人が妙法蓮華経の五字の信念受持を説き示されることによって具現化したといえます。

この法門は御書にもしばしば説かれ、耳目に触れることも多いのですが、難解中の難解なため、私を含めてこれを満足に理解できる人はほとんどなく、そのため御書の解釈も危ういことになります。そこで、用語の知識ではなく、一念三千の思想的な概要だけでもお話しをして、法華経と日蓮大聖人の仏法を信解する一助にでもなればとの思いから、また自身の研鑽を兼ねて、あえて取り上げている次第です。

瞬の心の働きは法界全体と不二の関係にあるというものです。

華厳経では一即一切と説いて、ものごとの本当の姿は、あらゆるものに繋がり通じていて、ちょうど宇宙大の網のようにすべてのものが繋がっていて、周囲と関係無しに一つの網目だけ個別につまみとろうとしてもそれを取ることはできません。一つの網目だけつまんでも全体に影響してくるのです。我われの身心も本当は法界全体に関係性が広がっていて、そこではじめて何某という一個の人間の生命活動があるのです。

そして法華経では、それがさらに一重深く立ち入って互具互融を説き法界平等が徹底されて、草木成仏とか、あるいは国土成仏ということを説くのです。

このことは「観心本尊抄」にも

問うて曰く、百界千如と一念三千と差別 如何。答へて曰く、百界千如は有情界に限り、一念三千は情非情に亘る。

といって、その挙証に次の文を挙げておられます。

「金錍論に云く『乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵、各一仏性・各一因果あり。縁了を具足す』等云云。」（全集二三九頁）

また「草木成仏口決」では、

「止観の一に云く「一色一香中道に非ざること無し」。妙楽云く「然も亦共に色香中道を許す、無情仏性惑耳驚心す」（全集一三三九頁）

と、これは華厳の澄観が、有情はともかく無情は成仏できないとしたことに対し、妙楽大師が無情も成仏できると反論した教説を示されたものです。

無情でも草や木等の植物に仏性ありとすることは多少理解できないわけではありませんが、驚くべき事に一礫（石粒）、瓦礫、一つの塵に至るまで、各一仏性、各々の因果、それに仏性の要素となる縁因と了因と正因と、この三つを具足しているのだから、石ころや土塊に至る迄、仏になるべき仏性を持っているといわれたのです。いわゆる一塵三千であり、国土の成仏を説いたのです。

名も無き草花にも仏性が……

このことが難信難解なのです。この難信難解ということには二つあって、一つは観門の難信難解、もう一つは教門の難信難解ということです。

教門の方にもまた二つ、教相上のことでは法華経迹門の二乗作仏と、本門の久遠実成の二つが、難信難解なのです。この二つは、従来のいろいろなお経に説かれてきたこととは、まるっきり違う教を説かれたからです。

例えば、爾前経においては、二乗は永久に成仏できないといわれたのですが、法華経に来ると、二乗をはじめ悪人も、あるいは一切衆生も、すべて成仏できると説かれたのです。

それから、仏様がいきなり久遠実成ということを言い出して、自分はけっして今はじめて悟りを開いたのではなく、久遠の過

去からずっと衆生を説法教化し済度してきたと明かされたのです。教門ではこれが信じ難く解しがたいことです。

それから観門、要するにものの見方の上においては、人間と草木と瓦礫とは絶対別個のものと思い込んでいますから、それもまたみな妙法の一分であると説かれても信じがたいし、ましてや、人間は修行によって仏になるという説は理解できるけれども、石ころや土塊に修行や覚りはありません。修行のないものがどうして仏になるのかとか、修行する意味がなくなるのではないかという疑問にまで発展してくるのです。

このことについて大聖人は、「内房女房御返事」では、

「妙法蓮華経は（中略）譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し。一塵に三千を尽くす法門是れなり。」（全集一四二一頁）

と仰せられて、一念三千の法門を、一塵三千とも記るされております。さらに進んで「白米一俵御書」になると、

「月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり。此れをもってしろしめせ。白米は白米にはあらず。すなはち命なり。」（全集一五九七頁）

と、ここでは白米の例をあげて、白米はけっして人のほかに白米があるのではなくて、白米の中にすでに人の命がある、白米そのものが命だと、要するに自分という者は他者や環境と皮膚で隔てられた自己をいうのではなく、全部法界の中で相互に関わりあって、その瞬間が自分なんだということで、法界すべてが自分の当体になるのです。

のどかな内房地区（富士宮市）

空気も光も水も、あるいは大地も、草木も石ころや土塊も、すべてその瞬間にそれをひっくるめているのが妙法蓮華経、妙法という自己であると、その上に我われも今の現実、現象ということがあるという捉え方をされるのです。

ですから、まったく物事を差別、分別して、知識を加えていくというのとは逆に、直観的に自分の命の有り様というものが、この大きな大自然や大宇宙と一体となってあるということ、あるいはこの一切衆生、我われが人間として生きている上において、言葉を使ったりいろいろな生活を維持していることは、実に長い歴史の中で人類が作り上げてきた、一つの文化でもあるのですが、そういうこともひっくるめて、すべてのあらゆる法界全体と一体となって、今の命が、今の自分の一瞬間が、一念があるという捉え方をされるのです。

《法界と一体の我等》

御書においては、そのことをいろいろに表現されていますが、まず「観心本尊抄」では、

「妙楽大師云く『当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に成道の時、此の本理に称（かな）ひて一身一念法界に遍（あまね）し』等云

云。」（全集二四七頁）

身とは正報でもあるこの身心のこと、土とは我われが生きる依報の国土世間のことを言いますが、その「身土が一念の三千」ですから、依報正報は不二ということでもあります。

したがって成道された仏の観見は一念三千観ですから、その仏身も自ずから法界全体をあまねくわが仏身とご覧になっているというものです。

ここに一つの成道の原理が示されているのです。この一身一念は、けっして自分だけではなく、今だけでもなく、すべてが久遠の時の流れを越えて、広大無辺の法界につながるいのちであるという、法界即妙法蓮華経、法界即自身という当体そのものであると法華経の中に説かれて、それを実践されたのが大聖人だということになるのです。

「一身一念法界に遍し」ということは「三世諸仏諸仏惣勘文抄」では次のように表現されます。

「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして、即座に悟りを開きたまひき。」（全集五六八頁）

すなわちここでは成道の肝要を、五大即妙法蓮華経の開悟と表現されております。また、「諸法実相抄」には、

「又云く『阿鼻の依正は全く極聖の自身に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず』云云。」（全集一三五八頁）

といって、阿鼻地獄の依報と正報は、まったく極聖（仏）の自身に処しているし、また毘盧（仏）の身土は、凡夫の一念を超えることはない。何故なら十界互具、一念三千だから仏も衆生も絶対的な隔たりはないのです。

「心清ければ土も清し」（全集三八四頁）

といわれるように、我われの心が妙法蓮華経を受持した瞬間に、我が身のみならず、法界全体、あるいは依報の国土全体がそのまま寂光土になるという捉え方です。

話は変わりますが、法華経の詩人でもある宮沢賢治の詩の中にこういうのがあります。

「まずもろともに輝く宇宙の微塵となりて、
無方の空に散らばろう　」

この短詩に垣間見える賢治の心象風景などは、こうした法華経や御書の教説を抜きにしては考えられないものです。

ところでかつて中曽根康弘元首相が施政方針演説で「山川草木悉皆成仏」という仏教用語を用いて話題をよんだことがあります。これの元は中国成立の「中陰経」の「一仏成道観見法界、草木国土悉皆成仏」という偈で、草木成仏の思想が広く受容された日本で変化した言葉です。ですから草木国土は自ら修行して成仏するのではなく、仏の一念三千観によるならばいずこも寂光土（仏国土）であり、依正不二ですから草木国土も成仏するというもので、法界同時の成仏ということと同義になります。

言い換えれば凡夫の我われも、物の見方がまったく違ってしまったら、その都度世界は一変します。たとえば無差別殺人の犯罪者のような心理になったら、世界はすべてが思い通りにならず、瞋りをぶっつけて破壊すべき地獄に見えてきます。しかし、その真っ暗闇のような心の世界にわずかな希望の光が差してくれれば、それもまた一変して見えるに違いないのです。

あるいはまた、法華経の信仰に透徹すれば、

「大火所焼時　我此土安穏」

と自我偈に説かれていますように、凡夫にはこの世の終わりが来たというような絶望的な状況の中にあっても、我がこの土は安穏で、慌てることも、狼狽えることもなく、あるがままに受け止めて行くことができるといわれているのです。

それは普通は人間が持っている我利我欲、我見我慢の偏執を自身と執着する思い込みから抜け出られないものですが、事一念三千の妙法蓮華経を一心に受持することが、その頑なな我見の煩悩を覆って、己れのいのちが三世十方の法界に遍満する妙法蓮華経そのものであるという信観をもたらすからです。そうすると生死観でも、死があるから新しく生命が生まれることができ、人類の生命はそうやって流れとして保持されてきたことが分かる。人類などの生物種の系統のみでなく、一個人の身体をとっても次々と古い細胞が死ぬからこそ新しい細胞が生まれてくる、死があるから生がある、生があるがゆえに死があるという当たり前のことが受け入れられる。普通はこれがなかなか認めたくない。実相を受け入れられないから、不安に曝され、忘れようと努めたあげく、死に直面したらこの世の終りだと、大変な迷い、絶望、恐怖にさらされてしまうのです。

それも真に妙法蓮華経の信仰に徹すれば、自己は法界に遍く拡大し、永遠の寿命を感得できるのであり、しかも幸いにしてその対境として事一念三千の御本尊が図顕されているのです。

次々と古い世代の人たちが死んで、新しい命が生まれてくることによって人類は生きて来たのです。もし妙法蓮華経を受持できれば「今者已満足」といって、多生劫合、生々世々、長い間求めてきた正法がこの妙法蓮華経の信仰であり、この正法にめぐり値い、思い通りの人生を生きて良い人生だった、またこの世に生まれることになったら同じような人生を生きたいものだ、という本当に満ち足りた感覚で、臨終を正念に住して迎えることができるのだと思います。ここで多生曠劫というのも、法華経の生命観です。また、「蒙古使御書」には、

「所詮　万法は己心に収まりて一塵もかけず、九山八海も我が身に備はりて、日月衆星も己心にあり」（全集一四七三頁）

と、広い宇宙大のことまでが我われの己心中にあるとされております。それ故に、大聖人はしばしば未来を見通されて謗法を諫められておりますが、その予知された事は、法華経の行者の己心中の一念三千に照らしみれば分かるということなのです。

作家や役者などが言うことですが、未知の登場人物でも、その心が描けるのは、自分の心の中にもいろいろな心があって、例えば人の不孝を見て喜ぶような気持ちもあれば、あるいは何事も面倒くさいという怠惰な心もある。逆にそういう賤しい心を反省して、正しい方向へ自分を励ましていることもある。そこで自分も一歩間違えたら犯罪者と同じような心を起こしたかもしれないのであり、作家や役者は我が心に照らして、そうした心理を表現し、一人の人間でありながら、いろいろな人格を描き分けてドラマができるのです。

「未萌を知るを聖人という」とも仰せですが事一念三千とは三世の因果を見通す仏眼を具えた仏身でもあります。

これは「御本尊七箇之相承」という富士門流の相伝の中に、

「師の云く、法界の五大は一身の五大なり、一箇の五大は法界の五大なり。法界即日蓮、日蓮即法界なり。当位即妙不改無作本仏の即身成仏の当体蓮華、因果同時の妙法蓮華経の色心直達の観心法妙の振舞ひなり。」

とあって、要するに、妙法蓮華経そのものが日蓮であるということなのですが、滅後末法の御本尊は事一念三千即自受用身、法即人、人即法の本尊として南無妙法蓮華経日蓮在御判の曼荼羅本尊を図顕されましたが、これこそ法華経の行者が証得された一念三千の法界を表現されたものなのです。これは大事なことですが、時間も過ぎておりますので、御本尊のことについてはまた日を改めて次の機会にでも申し上げたいと思います。

《日本人の思考の底流にあった一念三千》

ところで、日本人は昔から道具を大切にしてきました。日本人にとって道具はけっして単なる物体ではなく、自分の分身、相棒であったのです。また、自分の魂でもあったのです。

職人の世界では、丁稚で入ってまず最初に学ぶことは、掃除と、道具を大事にすることです。そういう伝統がイチロー選手や松井選手にまで影響していて、アメリカに行ってグローブを一所懸命磨いていたら、周りから怪訝な顔をされた、というような話にまで結びついているのです。

欧米人は基督教などの造物主の観念ですから主体と客体とを明確に区別しますが、日本の場合は、不二の思想で主体と客体、人とモノが連続し境界はあいまいです。この点からも、日本人の思考の底流には一念三千の底流があったものと思います。

何れにしても、一念三千・草木成仏は仏典だけでなく謡や太平記にもみられるように鎌倉・室町期から庶民に根づきはじめ、道具にも命を吹き込んで心を込めて扱ってきたものです。筆供養などを行った背景にはそうした風土があったのです。

日本人が大切にしてきた道具

ですから、そういう対立した概念を止揚する、もうちょっと高い視点、あるいは別の角度からものを見る、そういう二にして不二の考え方は、ものすごく大切なことだと思うのです。

もちろん不二だけではいけないのです。現実の世界というのは競争で、悪と戦わなければならないことが沢山あるのですが、ただその悪と戦うだけがすべてではなくて、善も悪も共に越えた世界があることを心に止めておかなかったら、どこまで行っても戦いから逃れられないのではないかと思います。

要するに、すでに日本人が失いかけた物事の考え方、思考方法の中に、法華経の一念三千が深く浸透していたことを知っていただいて、我われは、せっかく最高の仏法に出会ったのですから、何としても道を求めて、よりよい人生を歩んでいただきたいと思います。

南無妙法蓮華経

（了）

【御書と日興上人（一六三）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（九七）

松田銘道

前回は、宗祖が文永十一（一二七二）七月二十六日付送り状の『弁殿御消息』に、「此書は随分の秘書」の『法華取要抄』を弟子の日昭師に与えられたことについて検証しました。今回は、日昭師に授与された『法華取要抄』は現存しないものの、中山法華経寺本の『法華取要抄』から、どのような法義が示されたのかみていきます。

宗祖は、『法華取要抄』（文永十一年二月に構想し十一月に完成）に、「いまだ存ぜられざる」（『弁殿御消息』）との法義を、十八に及ぶ問答から説示されています。

順次、問答の要点を示すと、まず①では、「法華経は誰人の為にこれを説くや」との問を設け、

「末法の中には日蓮を以て正と為すなり」

と、「法華経」はすべて宗祖のために説かれている、との見解を示されています。

次に②では、「其の証拠、如何」との問いを設け、

「『況滅度後』の文是れなり。」

と、「法華経」法師品第十に、釈尊の在世ですら「法華経」を説こうとして数多くの難を受けられた。ましてや仏の滅後＝末法に弘通する者には更なる怨嫉と大難が生じることを予証したご文が、その文証になると示されています。

「況滅度後」が末法を示しているとの見解は、当抄の前年、文永十（一二七三）年四月二十五日の『観心本尊抄』に、

「迹門十四品の正宗の八品は一往之れを見るに二乗を以て正と為し、菩薩・凡夫を以て傍と為す。再往之れを勘ふれば凡夫・正像末を以て正と為す。正像末の三時の中にも末法の始めを以て正が中の正と為す。」

と、「法華経」迹門の正宗八品（方便品第二～授学無学人記品第九まで）について、「一往」＝通途では在世得脱の声聞・縁覚の二乗を救済することが主目的となっているのに対して、「再往」＝真意は末法衆生の救済のために説かれた、との見解が示されています。

その『観心本尊抄』の「末法」＝「正」となることが、当抄では「末法の中には日蓮を以て正と為すなり」と、その「正」を宗祖と規定されています。

③では、「日蓮を正と為す正文、如何」との問いを設け、

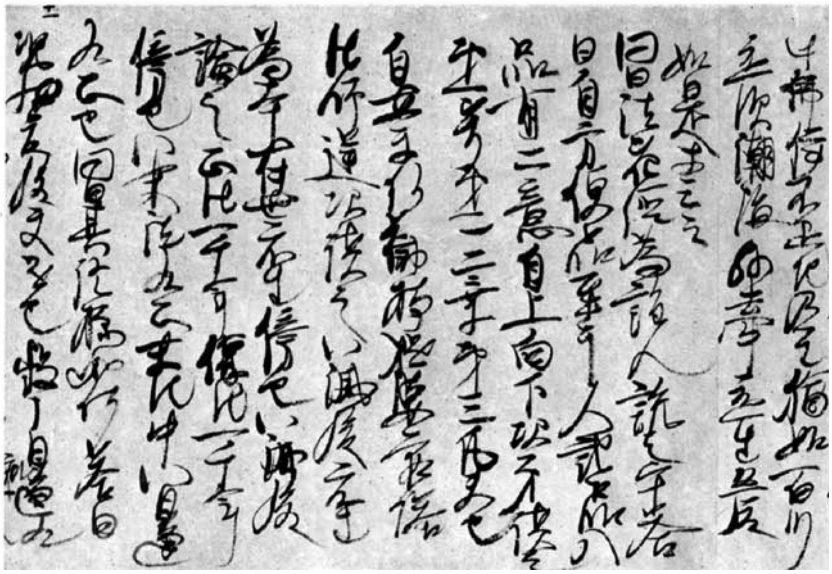
「『諸の無智の人の悪口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん』等云云。」

との勧持品第十三のご文を正文に示されています。このご文は、八十万億那由佗の菩薩が仏滅後に種々の大難＝三類の強敵に耐えて「法華経」を弘通することを異口同音に誓った二十行の偈文です。こ

こに宗祖は法華経を身読しているとの確信を示されていますが、当抄より二年前、文永九（一二七二）年二月の『開目抄』に、

「法華経の第五の巻勧持品の二十行の偈は、日蓮だにも此の国に生れずば、ほとをど世尊は大妄語の人、八十万億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし（―中略―）。日蓮なくば此の一偈の未来記は妄語となりぬ。」

と、宗祖が「二十行の偈」を身読しているとの確信と、それは仏の未来記の実現、助証となる、と示されています。



『法華取要抄』（真蹟中山法華経寺蔵）。当抄は全二十四紙が現存し、その内、十一紙目四行目からは、「問曰」と、これより十八の問答となっている。その問答から、「いまだ存ぜられざる」（『弁殿御消息』）法義が門下に示された。

ところが、仏の未来記の実現、助正の確信の自讃については、④にて「自讃は如何」との問いを設けてあるように、自讃＝自慢と受け止めた門下もいたようです。それに対して、

「喜び身に余るが故に堪へ難くして自讃するなり。」

と、自讃は自慢ではなく、「喜び身に余る故」の法悦であると示されています。

法華経身読＝自慢＝法悦については、当抄より三年後、建治三年（一二七七）六月の『下山御消息』には、

「自讃には似たれども本文に任せて申す。余は日本国の人々には上は天子より下は万民にいたるまで三の故あり。一には父母なり、二には師匠なり、三には主君の御使ひなり。」

と、末法における日本国の衆生を救済する「父母」、「師匠」、「主君」との三徳を備えている、との自覚として示されています。

その三徳の自覚に関しては、すでに文永九（一二七二）年二月の『開目抄』に、

「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」

と示されています。しかし、『開目抄』はご真蹟本が焼失し、また古写本の仏性院日奥本では「シタシキ父母」、寂照院日乾本では「シタシ父母」と伝えていることから、「親し（き）父母」とも解釈されています。

それでも、『開目抄』には法華経身読の自讃＝法悦が示されていることから、末文にて「しうし（＝主師）父母」との三徳の自覚が示されたものと思われます。

【採過拾新録】

秋山ちえ子

「戸田城聖氏大奮戦」

『お勝手口からごめんなさい』

（昭和三十年春陽堂刊）より

著者の秋山ちえ子

大奮戦

ラッシュアワーの混雑は、乗物ばかりではない。最近は神仏の世界も全くのラッシュアワーで、新興宗教とよばれるものは、全国で四百五十余り（三百万人を動員）といわれ、それぞれ信者獲得にシノギをけずっている。

その中で特に目につくのは、朝鮮動乱後のニューフェイスといわれる創価学会。世の批判も何のその、大奮戦の巻といった感じである。

これまでは、新興宗教の客は、〝知性にとぼしく社会性にかけ、生活があまり楽でない、しかも更年期の婦人〟が大部分といわれたが、最近ではぐっと若い層にひろがってきた。

特に、創価学会は、教員、警察官、労務者、青年層にくいこんだ。それあってか、この前の地方選挙、参議院選挙では、六十名に近い議員を議場に送り、いまや、保守、革新両党にとっても共通の敵である。もっとも執拗な信者の獲得方法や、信者を総動員し、違犯でつかまるのは〝法難〟と解釈する。このような運動にたいしては、とかく、悪評も高い。

つい最近は、団結を誇りとする炭鉱労働者組合――特に北海道炭労――が、〝組合の団結を破壊する宗教活動には組織をあげて対決する〟という声明で、創価学会の攻勢にたいしてかまえている。組

秋山ちえ子　ジャーナリスト、評論家。一九一七年生まれ。東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大）卒。国立東京聾唖学校の教官退職後、一九四八年よりＮＨＫラジオ放送をはじめ電波と活字の仕事を続ける。ＴＢＳラジオ「秋山ちえ子の談話室」は、一九五七年から二〇〇二年の放送終了まで四十五年間にわたり放送され、菊池寛賞等を受賞する。二〇一六年四月六日没。九十九歳。

合が資本家と対決するというならわかるが、新興宗教を当面の敵とするというのだから一つのトピックである。

あれこれいわれながらも、この会は上昇の途をたどっている。なぜという理由は、社会不安、政治への不信、自己の確立をし得ない人々、義理人情とかいろいろあろうが、これは次の機会にゆずって、何しろ昨年七月には約二十万世帯、六十万人といわれた信者数が、最近は約三十八万世帯、七十万人にふえ、会では今年中に五十万世帯にふやし、二十六年後には、全日本を改宗させ、中国、インドにもおがませ、地上に楽土をつくるのだと、自信をもって公言している。

さて、この闘争的な創価学会の会長を訪問するともなれば、訪ねるほうも婦人会の会長の場合とはちょっとばかり覚悟のほども違ってこようというもの。いや、かえって何の用意もなくフラリと行ったほうがいいかもしれないなどと、気もつかれる。

四畳半の応接間

問題の創価学会の会長は戸田城聖氏。

面会した場所は、芝、白金の自宅。失礼ながら、自邸というにはあまりにもオソマツである。

今をときめく宗教の会長ともなれば、キャデラックとまではいかなくとも、自家用車の一台ぐらいは……と思ったが、それもない。戦災にはあっていない会長宅は、いかにも古くさく、実直に勤めぬいたサラリーマンの住まいのくつろぎを感じる。コンクリートに茶色の色づけをしたせいか、かえって安っぽくみえる塀の長さもせいぜい二間。この塀の左端から二、三歩入ったところに、すぐ玄関。奥行の深い家だが、庭は一かけらもなさそうである。

「まあ、お待ちしていました。どうぞ。」と明るい声で女中さんと一緒ぐらいに玄関に出てきた幾子夫人は、色白で丸顔、さっぱりとした白と紺のお召の単衣（ひとえ）に黄土色の単衣帯。夕方の買物に行って、そこらで行きあう奥さんの感じで、気やすい。

通されたのは玄関の右手の応接間。白いカバーのかかったソファーに、椅子にテーブル、三角戸棚、花台で部屋はいっぱい。人間が通るときは、体を横にする必要がある。花瓶にさされた白百合にカーネーションは、花屋さんから急いで買ってきたばかりのようにピンとしている。壁にかけられた古めかしい『質実剛健』の額が、暗示的である。

すぐに奥から出てきた戸田会長。挨拶といったら、

「やあやあ、おいで、おいで。」

といった簡単なもの。縞のズボンに黒のシングルの上着、やや禿げあがった額、薄い眉、チョビひげ、強い近視の眼鏡のこの人は、一見、そこらの会社の永年勤続の総務課長といったところ。

あけっぱなしで、話し好きで、陽気である。

――創価学会の会長の住まいは、入るのに気が重くなるような御殿かと思ってきましたが、失礼ですが安心しました。――

会長　「そうかいハハハハ。会長だといってもタダ。役員もみんな無料だよ。事務員には出してるがね。月給は、他に会社の相談役をしてるそこからだよ。大したことはないがね。この家は戦前に六千円で買ったものだよ。下が八畳にこの応

接間と、三畳の女中部屋、それに、風呂場と台所。二階は八畳に六畳。家内の両親と坊主(慶応在学の喬さん・二三歳)が一部屋ずつ占領してるんで、われわれのいるところがなくなり、奥の方に、六畳一間を上と下に建て増したんだよ。見せてあげようか、家の中を。」(たてつづけにしゃべって、さっさと立ちあがる。)

——まあまあ、あとでお願いします。——と手で制して、ほこ先を夫人に向ける。

——会長宅の生活費は、どのくらいですか。——

夫人　「それがね。主人は二万円でやれっていうんですけれど、とても……。第一、すき焼ですと、百目三百五十円から四百円の上等のを食べたい人なんですから、二万円はひどいっていって、いま三万円にしてもらっているんですよ。」

——御夫婦に坊ちゃんに御両親に女中さんと六人で三万円ですか。ちょっと大へんですわね。——

(女は女同士と、つい夫人に加勢する。)

会長　「三万円って食べるだけですよ。坊主の学費、電灯、ガス代、みんな私が別に払うんですよ。まあ、六人家族で五万円というところでしょうね。

三万円で何もかもやってる人のほうが世の中には多いんだから、ぜいたくはできませんよ。なあ、そうだろう?」

(会長はなかなか台所の経費についてもくわしい。)

戸田城聖夫妻(挿絵より)

——奥様は学会のことでお手伝いは?——

夫人　「別に何にも。家のなかで母親業と主婦業ばかりです。」

——毎朝お題目をあげてお勤めをなさいますか。——

夫人「いいえ。つい忙しいんで——。それでも何か困ることがあると、せっせとお題目をあげはじめます。虫のいい信者で……。」

会長　「うちは全く自由なんですよ。この前の選挙の時だって、長男のヤツ、労農党や社会党に投票するんだからね。おやじが保守党へしたのに……。」

——その坊ちゃんが創価学会の後継者ですか。——

会長　「あれは嫌いですよ。銀行員かサラリーマンになるといってますがね。それでいいんだ。」

物わかりのいい、全く自由な父親といったところ。急に私のほうにむきなおって口をきる。何ごとかと思ったら、

会長　「ときにちょっと、ビールを飲んでいいでしょうか。ビールをね。」

——どうぞ御自由に。それは奥様の会計ではないんでしょうね。——

会長　「もちろん別途ですよ。酒が好きでいけませんよ。では失礼。」

うれしそうな顔をして、夫人に用意を命じる。コップの中にウィスキーを五分の一ほど入れ、それにビールを〝トック　トック　トック〟とついでぐっと一杯。もうこの頃は椅子の上にあぐらをかいて

いい御機嫌。カメラを向けると、

会長　「朝からこんなとこ撮られると、わしはいいが、会のものが怒るからやめてくれよ。それよりか、奥さんと並んで撮ってもらおう。よくうつしてくれよ。こうみえても、この人とは恋愛結婚でね。その恋愛時代が君、長いんだよ。三年もあったんだ。」

夫人　「いやですわ、何でもしゃべって。もう三年で銀婚式になろうというのに。」

と夫人は少し照れながらも、年の功。ゆったりと〝何でもしゃべる夫〟を笑顔でみつめている。

結婚当時貧乏して、エンゲージリングを質屋に持っていった話などつきない。

新興宗教にあらず

世間話や家庭の話をしているときは、三度と六度という分厚い眼鏡の奥の小さい目は、トロリとおだやかだが、一度、宗教のことになると、少し勝手はちがってくる。

――命令一下で、信者を思うように動かせて、会長の役は面白いでしょうね。――

会長　「会長はいやだね。なりたくなかったんだよ。わしは商売人だからね。命令一下なんて、そんなことできるものか。みんな自分自分の考えを持っているもの。」

――新興宗教は、信者はお金がかかり、教祖は大へん儲かるということですが、創価学会はお金がかからないとうたっているのは本当ですか。――

会長　「本当だよ。よその宗教じゃ、一年の予算が何億だといってるが、私のところは、月二十万円、年二百四十万だけで十分だ。信者は、入会しても何もいらないよ。はじめに本山に二百五十円かな？　それに、じゅず代百円、経文書代二十円、それだけであとは何もいらない。」

――そうすると、学会は本山から二百五十円のリベートでも受けとって、経費としているんですか。――

会長　「一銭も受けとりません。」（眼鏡の奥の目が刺すように輝く。）

――そうすると、二百四十万の出どころは。――

会長　「あんたもしつこいね、もちろん寄附はありますよ。ことしは四百万くらいあったかな。それは、財務部員というものがあって、この創価学会にはいってから幸福になった人とか、うちがらくになった人から出してもらっているんですよ。無理に寄附せいなんて決していいません。」

――何か他に会社をやっていらっしゃるとききましたが。――

会長　「それはだね。創価学会とは何の関係もないものだよ。最高顧問で、一ばんの株主ですがね。」

――いま新興宗教の行き方として、科学をとりいれ、医学や教育の方の事業をすることがはやっていますね。天理教が全予算の八割を教育につかい、考古館もりっぱですし、病院、孤児院もあります。立正佼成会も円型校舎や新しいビルをたてて、学校教育や医療の面で活躍していますが、その点創価学会は。――

会長　「ちょっとあんたに質問しますがね。答えていただけますか？

シャカは、学校を建てましたか？　病院を建てましたか？　日蓮が事業をしま

したか？

それ、私もシャカや日蓮とおなじだよ、ハッハッハ――。

天理教の真柱（しんばしら）の中山さんは偉い人だそうだ、まだあったことはないが。立正佼成会なんてダメだよ、金とることばっかり考えている。」

――北海道の炭鉱労働組合が、組織を乱す創価学会と対決するとイキまいていますが。――

会長　「アア、あんなやつなんて、誰が何を言ってもやってやるぞ。命をなげ出してもやってやるぞ。最後は死ねばいいんだろう。死ねば。

売られたケンカならいつでも買うよ。こっちが青年部隊の幹部をダーッと送ったら逃げるようなヤツは相手にできないよ。総評なんていったってブルジョア労働貴族だ。あんな奴らに負けてたまるかい。」

大分イサマしいことになってしまった。

もうこの頃には、会長の全身にアルコールがまわったらしく、ますます意気軒昂。

「わたしはあんたの言ったことで、一つ気にいらんことがある。」

と、はげしい語気で会長がのり出す。

会長　「いいですか。新興宗教、新興宗教というが、創価学会は、日蓮正宗の中の一つの集まりなんですよ。これは七百年の歴史をもっている。それを新興宗教というのがケシカらん。」

夫人　「本当にそうなんです。わたくしも新興宗教と聞くのもいやで……。」

なるほど至極もっともだが、世間では新興宗教という方が通用するのでカンベンを願いたい。

いやなことをいうついでにと、口を切る。

――創価学会の、信者を獲得するときのしつこさや、この前の選挙のときのあくどさを、世間ではヒナンしていますが、この点はどうお考えですか。――

この問いに対しては、今までにない冷やかな目の光りと、人を圧するような大声がひびく。

会長　「選挙の買収なんてウソだ。他の者がしたことを、みんな創価学会のせいにしている。信者のことは、いいことをすすめるのが何が悪い。

あんたも信者になりなさい。この宗教に入りなさい。あんたは信者になれる。確信を持つと、人間は幸せになれる。」

と、指をキッとつき出してニラみつける。暗示にかけられそうな気もする。

――いや、それがどうも……わたくしは何でもうたがい深くて。別に他人の宗教は否定しませんが、自分がよければそれだけでいいと思うだけで、人にまで強制というのはいけないと思うんですがね。――

（これには一言も返事なし。もう一度、するどい声があたりの空気をゆすぶる。）

会長　「あんた、入りなさい。信者になりなさい。」

私は商売人

戸田会長の宗教歴は、創価学会の会長になって十六年余り。

そもそも創価学会の本山は、静岡県富士宮市の郊外にある日蓮正宗総本山大石寺で、創価学会は、大石寺の講の一つだという。

初代会長は、新潟県出身で、東京の小学校長をしていた牧口常三郎氏。当時は

創価教育学会と名のっていた。

戸田会長と、牧口初代会長との、そもそもの顔合わせは、三十七年前の東京下谷の西町小学校。二十一歳の戸田青年は、産休の女教師の代用に採用され、牧口校長の下で教員をしたのである。代用教員といっても、やり手の戸田先生は、当時、都にいた前田多門氏に働きかけて、退職のコースをたどっていた牧口校長をもう一度、芝、白金小学校の校長に返り咲きさ」せた。

一方、その思想に共鳴して、会を助けもした。やがて、当時の試験地獄の副産物の受験準備校に目をつけ、自分はさっぱりと教員をやめ、目黒に〝時習学館〟という私塾をつくった。生徒数三百を集め、隆盛をきわめたそうだ。だがここは、戸田塾長の私行上のことが噂になり、生徒の数が減り、経営がなりたたなくなった。そこで今度は参考書の会社に転向。ここもホクホクだったという。

「何しろ、当時は数学の参考書といったら、幾何の佐久間謙、代数の吉岡斗松、算術の戸田城外（城聖）として名を売ったものだよ。」

と、今でも自慢の一つであるらしい。

もちろん、創価教育学会で牧口氏の片腕となりつつの商売である。

戦争中、この会が、〝教育勅語は道徳の最低水準を示すに過ぎない〟とか、皇大神宮のお札を否定したことなどから、〝不敬罪〟にとわれ、牧口会長、戸田理事長をはじめ二十一名の幹部が検挙され、獄中の生活をしていた。才気換発の戸田理事長は、宗教より商売に身がいっていたようだが、この苦しい生活の中で、はじめて心から〝南無妙法蓮華経〟と、お題目をとなえたと聞いている。

終戦直後出獄し、昭和二十一年に〝創価学会〟と名を改めて再出発。二十六年に、戸田氏が二代目会長に就任。その後の会の動きは誰もが知っている通りである。

今年の十一月には、富士の裾野に大講堂ができる。敷地二万坪、建坪千二百五十坪、鉄筋コンクリート五階建（一部七階）、冷暖房、エレベーターつきというから、今までの抹香くさい仏様の住まいとは打って変った超モダンなもの。

天理教の〝おやさとやかた〟、立正佼成会の〝大聖殿〟とともに、名物の一つとなるものであろう。ふだん金がかからないという創価学会も、この総工費四億円だけは、末端の会員にまで寄附を募ったらしい。

六十万の会員の信者と、〝チリも積れば山となる〟という言葉を、〝私は商売人〟と宣言する会長は、十分に胸の中で計算してのことと思う。

「さあさあ、家の中を見せてあげよう。みんな見せるからね。」

と、立ち上がって先に立つ戸田会長の後姿は、いくら欲目で見ても、退職に間近い総務課長である。

庶民に共通の、哀愁に似たものがにじみ出ている。これが白馬〝銀嶺号〟にまたがり、白はちまきの若い女性数千人の分列行進を閲見（？）した人とは思われない。台所、風呂場、息子さんの部屋と、残さずあけて見せた。といっても、とりたてて見るべきものは何一つない、そこらの家の内とおなじであった。

いとまごいをして戸田家をあとにしたが、会長夫妻の庶民的な明るさと、土をもって、数本の蜜柑の木を植えている庭が印象的だった。

【寄稿】

弥山・八経ヶ岳・山上ヶ岳山行記

大阪地区　森　秀之

昨年の年の瀬に、二週に分けて大峰山系をソロにて登ることができました。

まずは、行者還トンネルの登山口から奥駆道出会から弥山を経て、八経ヶ岳を縦走しました。

八経ヶ岳は、大峰山脈の主峰であり仏経ヶ岳、八剣山などの別称もある。山名の由来は、役行者が法華経八巻を埋めたという伝説からきているとの事です。私にとっては何とも興味深い山であります。

八経ヶ岳は、上北山村の白川又谷方面から山全体を見ることができる。そこからは、八経ヶ岳山頂が弥山のコブほどにしか見えないようですが、実際は八経ヶ岳が弥山、明星ヶ岳を左右に従えてそびえている山様のようです。

夜中三時ごろ自宅を出発して、奈良県吉野郡天川村と上北山村の境近くにある行者還トンネル西口手前の駐車場に六時前に到着しました。

すでに三台駐車していて、各々真っ暗な中で、ヘッドランプを照らして登る準備をしていました。

私は、夜が明けて明るくなってから歩き出す予定で、一時間半ほど仮眠して出発しました。

登り口の行者還トンネル西口から第一チェックの大峰奥駆道出合まではかなりの急坂で、唯々黙々と登ること一時間ほどで到着しました。昨晩二十センチほど積雪もあり、また台風並みの強風で、ガスっている中を歩きますので、体感温度も低下し、手が凍えそうな状況でした。

アイゼン等の準備も無く想定外の山登りとなりました。奥駆道から石休の宿跡、聖宝ノ宿跡までは尾根道の稜線歩きで、新雪の上を歩き、時折ガスの切れ間に景色も見られて、ここは楽に歩いて行けました。

そこから弥山小屋へと、登りはバリエーションに飛んで道で、長いつらい階段があり、弥山小屋直下では凍結していたりしていました。

真っ白な山肌に、時折日光が差し込み、もののけ姫に出てくる森を彷彿させる木の枝々が、樹氷となり輝いているのが幻想的でした。

石休ノ宿跡

八経ヶ岳山頂にて

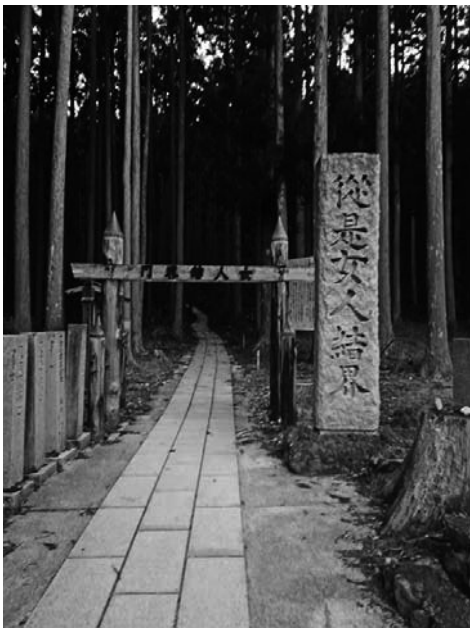
弥山小屋で、この日初めて登山者三人組と遭遇しました。小屋は休業で閉まっていて、三人組とその前で立ち話をしながら、行動食やコーヒーを飲みながら休憩をしました。

三人組は、一人が奈良在住の男性、もう一人は栃木からの男性、もう一人は東京からの女性と、たまたま昨年鹿島槍ヶ岳で意気投合して知り合いになり、百名山めぐりの一環として、今回は奈良在住の男性の案内で、この日は弥山・八経ヶ岳、翌日は大台ケ原に回るそうで、前日より車中泊で準備万端とのこと。何ともタフなメンバーで、話をしていても前向きな会話で楽しいひとときでした。そのままご一緒させていただき、八経ヶ岳まで縦走をしました。

八経ヶ岳山頂は、関西で一番高く一九一四、九メートルです。錫杖が刺さっていました。気温はマイナス七度とのことで大変冷え込みましたが、縦走中には、ガスっていた空が一気に快晴になり、三人組も「登った甲斐があった」と、大変喜んで何枚も写真に撮って満喫していました。

空気も澄んで霧氷も見られ、遠くは熊野灘から大峰山脈を三六〇度のパノラマ展望の恵まれて、大変なラッキーな山行となりました。

奈良在住の方が、こんなにいい天気はめったに無いというほどの山日和でした。まだ時間が十時過ぎでしたが、余りにも寒いので、明星ヶ岳をあきらめて、登ってきた道を慎重に、滑らないように足元を確認しながら、行者還西口トンネル登り口まで一時間三十分ほどで、昼前には下りてきました。その後は洞川温泉に浸って家路につきました。



女人結界門

翌週は、大峰山で一番メジャーな山上ヶ岳を周遊してきました。

早朝四時に出発して、六時三十分ごろに稲村ヶ岳の登山口でもある母公堂に到着して、清浄大橋～山上ヶ岳登山口～洞辻茶屋～陀羅尼助茶屋～鐘掛岩～西ノ覗～大峰山寺（山上ヶ岳山頂）～レンゲ辻～谷筋・林道～大峯大橋～母公堂のルートにしました。

急遽、天気予報が午後から今ひとつだったので、稲村ヶ岳の縦走を諦めて、午前中に下山できるルートに変更しました。

大峰大橋を渡ると「女人結界門」があり、それをくぐって登っていくのですが、丁度疲れたころに、今はオフシーズンで閉まっていますが、茶屋があります。

気温が〇度近くと低く、風も時々強く吹き、寒さよけに丁度いいところで小休憩が取れ、気分がとても楽でした。

その後は、山頂近くに「油こぶし」という岩場があり、さすがに一七〇〇メートルの高所ですので、岩場も凍っていてゆっくりと登りました。また有名な鐘掛岩を超えると絶景が見えるのですが、天気がすっきりせず、望んだ程の眺望は拝めませんでした。さらに修験の修行場で有名な「西の覗」に行き下を覗きましたが、さすがにものすごい絶壁で足がすくみました。

世界遺産でもある大峰山寺の手前の門の立て看板にあった、

「身口意の三行を整え参入召されよ」

という言葉が、興味をひきました。

そこから山上ヶ岳の山頂は、本堂の上の「お花畑」にあり、そこで一等三角点に手を合わせました。

そして、レンゲヶ辻への分岐を降りましたが、ここが今回の山行で一番危険なルートと感じました。道が狭い上に足元が悪く、階段の幅も狭いので、かなり慎重に降りて西側の結界門にたどり着き、レンゲ辻からここもあまりいい道ではなかったのですが、谷筋を一気に大峰大橋へと下って、駐車場の母公堂に午前中に到着し、今回は登りから下りの終わりまで、登山道では誰一人と会うこともありませんでした。

お花畑にある山頂の三角点

下山後は、今回も洞川温泉にゆっくり浸って、家路にと着きました。

大峰奥駈修行について、役行者が開祖と言われますが、よく言われるようになったのは、大峰信仰と熊野信仰が結びつく、平安時代以降とされているとのことです。

この頃になると、吉野と熊野を結ぶ全長百五十キロメートルの大縦走が盛んに行われ、七十五靡（なびき）と呼ばれる霊所で説教し、約二カ月もかけて修行したといわれています。

明治政府による廃仏毀釈で、修験道が壊滅状態になりましたが、昭和二年に復活して、厳しい修験道の精神は現在も受け継がれ、山上ヶ岳周辺は今なお女人禁制を守っています。

今から一三〇〇有余年前の白鳳年間、役行者をはじめ山岳修験者が、熊野本宮から大峯山脈を、南から北の大峯山（山上ヶ岳）に向かい修行場としていたようです。

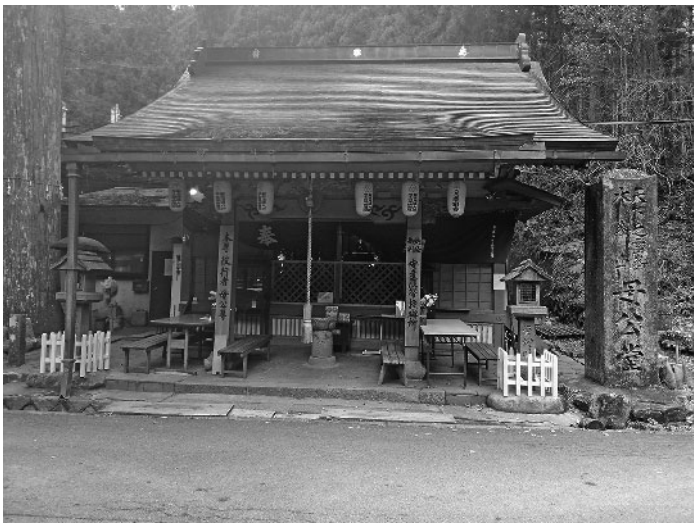
登山口の母公堂については、修行を案

じた役行者の母、渡都岐（とつき）白専女は、役行者の弟子・後鬼の案内で、葛城山の麓、茅原から険しい峠や山河を越えて、役行者が山籠りして修行している大峯山に一番近い、洞川の蛇ケ谷まで会いに来ましたが、この谷を渡ろうとすると、一匹の大蛇が行く手を阻み、どうしても渡ることが出来ません。

後鬼と替わるがわる、何度試みても駄目でした。弟子の前鬼を通じてこのことを知った孝行心の篤い役行者は、悩みに悩んだ末、このままでは母は私を心配して命の危険な山中を何処までも心配して追っかけて来る。蛇ケ谷に庵を建て母に住んでもらい、身の回りのことを後鬼に頼み、私自身が時々母を訪ねることにすれば、母も安心して留まってくれるだろう。早速、洞川の人たちに頼んで母の庵を建ててもらい、母公堂と庵の名を付けたとの伝承があります。

余談ですが、この前鬼・後鬼は、鬼夫婦で役行者に仕えたことで、人となり五人の子供がおり、その五人の子供がそれぞれ修験者の修行を助けるために、それぞれ宿坊を営み、明治の廃仏毀釈まで存続していて、今も前鬼に一軒だけ六十一代目として続いています。

また、その際に重ねて母を思う心から、母が後を追わないようにと「女人入山禁止の結界門」を建てました。これが「女人禁制」の始まりであり、一三〇〇有余年後の現在も守り続けられている歴史の重みです。


大峯山の登山口にある母公堂

これは「女性差別的」な解釈でなく、役行者の母を思う優しい心の現れであると解釈されているようです。また古代においては、山は魑魅魍魎が住む危険な場所と考えられていたようです。そのため子供を産む女性は、安全のため近づかない、近づいてはならない場所であったとするのだそうです。

そのような場所だからこそ、修験者は異性に煩わされない厳しい修行の場として、山岳を選んだのだといわれています。文明が進んで、山道などが整備されると、信心深い女性が逆に修験者を頼って登山してくるようになり、困った修験者たちが、結界石を置いてタブーの範囲を決め、その外側に女人堂を置いて祈祷や説法を行なったという説もあり、仏教の戒律や古代からの穢れの習わし等、色々と説があるようです。

この二週にわたって、大峯山系の一部を登ってみて、大変勉強になりました。歴史が古いのと、いろいろと伝承が残っているので、歴史好きな私には、興味深い山行でありました。

恵日だより

ご案内・お知らせ

＊お盆棚経のご案内

例年の通り、八月八日（土）からお盆の棚経に各家庭へお参りをします。

七月末にお参りする日を郵送でお知らせしましたが、ご希望の日、都合の悪い日がある方は考慮いたしますので、至急源立寺まで電話等にてお知らせください。

＊盂蘭盆会の参詣について

例年、盂蘭盆会法要は八月十五日（土）に奉修されますが、今年の盂蘭盆会は、新型コロナ感染予防のために、各地区別に分散して奉修いたします。

日程は、下の通りとなっておりますので、なるべくご自分の所属されている地区の奉修日程にあわせての参詣をお願いいたします。

13日（木）　午前十時半　大阪地区
同　午後一時　北摂地区
14日（金）　午後一時　豊能地区
15日（土）　午前十時半　兵庫地区
同　午後一時　槻木地区

また、法要参詣の際は、感染予防のため、必ずマスクの着用をお願いいたします（お忘れの場合は、受付までお申し出ください。）。

お塔婆の申し込みは、なるべく法要当日を避けて、事前のお申込みをお願いいたします。

※　※　※

なお、先日の幹事会において、併せて秋のお彼岸の地区割も検討され、裏表紙下記の様に決定しています。所属地区の日程にあわせてご参詣ください。

また、秋のお彼岸のお塔婆も合わせて受け付けていますので、受付までお申し込みください。

先師の教訓　日亨上人の言葉

「また興尊の御流れはいずれの辺地にありても、微少の存在であっても、富士の清流に相違はない。しかるに大本門寺宗団意識を忘れて、たがいに孤立して夜郎自大を悦ばざるをえぬにいたっては、まことに情なきしだいである。（日興上人詳伝二九〇頁）

「（佐渡小関の法華衆が遺跡を止めぬについて）「他の日蓮教団ならこれほどの奇跡を放置することはないが富士の信仰は純潔に過ぎて世界悉檀に背き方便をきらい過ぎ、ためにかくなり行くのかもしれぬ。現に房山の不動愛染の両曼荼羅のごとき単に御聖筆のみの現在の姿である。他教団にあったらとっくに利（悪）用せられて賽衆（さいしゅう）を充満させて自然に肉山となったであろうとも考えらるるはあえて不純の邪念と片づけては惜しい気持ちがする。（日興上人詳伝六二四頁）

＊各種行事の参詣について

各種行事は、行事予定表の通り行います。密集・密接を避けるため、法要の地区別日程での奉修、座席数の制限などはしますが、特に、参詣に際して予約は必要ありません。

参詣の際には、マスク着用や手洗い・手指の消毒等、感染予防に努めて下さい。

※源立寺本堂の玄関・トイレ前等にアルコール消毒液がおいてありますので、参詣の際はご利用下さい。

【訃　報】

〔豊能地区〕豊中市

宝寿院妙郁信女　七月四日寂

俗名二村郁子之霊　行年九十九歳

この度、右の方がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

【葉月詠草】

〔和　風〕

マイカーの　窓より香る　梅干か

帰宅急げる　土用の夕べ

幼ならの　おもちゃ取り合ふ　姿をと

カメラ向けるや　ポーズ取るなり

〔故　奥　はつ〕

船団の　所在知るなく　濡れに濡れ

むなしく戻りぬ　ひとりの寓居

夫征きぬ　故郷に老いゆく　父母残し

教職のみが　身の支へなる

【恵日俳壇】

〔農　婦〕

田も畑も乾いて久し大旱

喜雨のきて酒屋の田へも水流る

〔森　秀之〕

梅雨晴れを信じて明日の山支度

梅雨晴れやはるか遠くに八剣山

梅雨晴れの山々眺めて佇みぬ

八月の行事

一　日（土）　午後二時　お経日
二　日（日）　午前九時　講中勤行会・幹事会
　　午前十時　墓地清掃
八日（土）～十五日（土）　お盆棚経
十三日（木）　午前十時半　大阪地区盂蘭盆会
　　午後一時　北摂地区盂蘭盆会
十四日（土）　午後一時　豊能地区盂蘭盆会
十五日（土）　午前十時半　兵庫地区盂蘭盆会
　　午後一時　槻木地区盂蘭盆会

※九月号の継命・恵日発送は、
『槻木』地区が担当です。
十月号の継命・恵日発送は、
『大阪』地区が担当です。

秋季彼岸会地区別奉修日のご案内

※秋季彼岸会の地区割は、左の様に決定しています。地区奉修日に合わせてご参詣ください。

20日（日）　午後一時　兵庫地区
21日（月）　午前十時半　北摂地区
　　同　　午後一時　大阪地区
22日（火）　午前十時半　槻木地区
　　同　　午後一時　豊能地区

源立寺

恵日
令和二年八月号　通巻三〇七号
令和二年八月一日発行
編集兼発行人　菅野憲道
発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二）七五一－三一三五
E-Mail　qkanno@silk.ocn.ne.jp
購読料（含送料）　年間二〇〇〇円
加入者名　恵日編集室会計
〒振替口座番号　01380-2-12649